

IC stenosis を認めた。この狭窄が embolic source になっていると考え、患者の年齢を考慮して、塞栓源除去の目的でステント留置の方針とした。5 mm までの前拡張を行ったあと自己拡張型ステントを留置、血管撮影上十分な拡張が得られた。外力のかかりうる内頸動脈狭窄症には自己拡張型ステントが有用である。しかし、PTA よりも頻度が低いものの re-stenosis が問題とされており、慎重な follow-up を要する。

B-52) 自己灌流型バルーンカテーテルを用いた PTA

—頸部内頸動脈狭窄の1例—

原口 浩一・高谷 了 (北見脳神経外科)
坂本 靖男 (病院脳神経外科)

PTA 中の血流遮断により虚血症状を呈する場合、有効な拡張を得るのは難しい。自己灌流型バルーンカテーテルを用いた頸部内頸動脈狭窄 PTA の1例を報告する。

症例は73才、男性。右不全麻痺、自発性の低下、発語量減少を主訴に来院、MRI で左大脳 watershed 領域に脳梗塞、SPECT にて左大脳半球の広範な血流低下、DSA にて右内頸動脈高度狭窄、左総頸動脈閉塞を認めた。左大脳へは前交通動脈を介しての血流で補われている。数回の右片麻痺の憎悪と意識レベル低下があり、右内頸動脈狭窄に対する PTA を行い前交通動脈を介しての左大脳への血流増加を期待することとしたが、血流低下による虚血症状を呈すると思われたため、低分子デキストラン、仙台カクテル投与下に自己灌流型バルーンカテーテルを用いて血流が途絶えないようにした。術中、術後を通して虚血症状なく、PTA 後より発語量が増え歩行も安定した。

B-53) Fibrinolysis と Sinus plasty により改善したネフローゼ症候群に伴う脳静脈洞血栓症の一例

柘植雄一郎・片岡 丈人
瓢子 敏夫・高坂 研一 (中村記念病院)
諫山 幸弘・高田 英和 (脳神経外科)
宇佐美 卓・中川原譲二 (財)北海道脳神
中村 博彦・中村 順一 (経疾患研究所)

頭蓋内圧亢進症状にて急性発症した未治療のネフローゼ症候群に伴う脳静脈洞血栓症に対し Fibrinolysis と Sinus plasty による治療で症状の改善が得られた

一例を経験したので文献的考察を加え報告する。症例：33才女性、2日前からの顔面の浮腫に続いての頭痛、嘔吐にて搬入。CT 上は深部静脈が HDA に認められ、脳血管造影にて著明な循環遅延と両側横静脈洞、S 状静脈洞の閉塞が認められた。脳静脈洞血栓症による頭蓋内圧亢進症状と診断し、直ちに右横静脈洞での局所血栓溶解を行うも開通が得られず、引き続いて血管拡張用のバルーンカテーテルにて静脈洞形成術を行い部分的ながら再開通が得られた。脳血管造影上、循環時間は改善し、術前には認められなかった深部静脈の描出も得られた。臨床症状は術直後から著明に改善。血液、尿検査では総蛋白 3.7 g, 尿蛋白 4+ とネフローゼ症候群を呈しており、これに伴う脳静脈洞血栓症と診断した。

B-54) 高齢者に対する超選択的血栓溶解術

藤井 康伸・畑中 光昭 (十和田市立中央
病院脳神経外科)

「目的」高齢者(70歳以上)に対する、超選択的血栓溶解術の有効性の検討。「対象」過去3年間に、当科にて超選択的血栓溶解術が施行された70歳以上の高齢者14症例(70-85歳)。うち、1症例は、血管拡張術も併用している。閉塞部位は、内頸動脈が3症例、中大脳動脈が10症例、中大脳動脈+後大脳動脈が1症例。使用薬剤は、tPA が13症例で、ウロキナーゼが1症例であった。「結果」良好な再開通が7症例、部分塞栓残存が4症例、非再開通が3例であった。予後は、Ex: 3症例、Good: 2症例、Fair: 5症例、Poor: 2症例、Dead: 2症例であった。「考察」70歳以上の高齢者であっても、症例によっては、血栓溶解術の適応を持つ症例はあると考えられる。

B-55) 内科的治療では困難であった脳主幹動脈高度狭窄症に対する亜急性期バイパス手術例

小嶋 寛興・金子 伸幸 (白河病院)
塩川 芳昭・斎藤 勇 (杏林大学)
脳神経外科

【目的】脳主幹動脈高度狭窄症に対する亜急性期の血行再建手術症例から hemodynamic stroke に対するバイパス手術の有効性を検討する。

【症例1】70才男性。ラクナ梗塞後遺症で抗血小板療法通院治療中であつたが、右不全麻痺が進行し再入院。